

### ■（173）ようやく動き出した復興に戸惑う人たち

土砂を満載した大型ダンプカーが国道で列をなす。壊れたビルが重機で解体される。雑草の生える土地で測量が始まる。新しい店やホテルが建つ。映画「三丁目の夕日」のシーンではない。東日本大震災の被災地の復興に向けた岩手県釜石市の最近の光景だ。

防潮堤や道路に加え、住宅や市街地の復興工事がようやく動き始めた。ただ、前に進むと歓迎する人ばかりではない。被災地に住む目の不自由な人たちが戸惑っていた。全盲や弱視の人たちは、感覚でまちを覚えて外出していた。だが、津波でまちが一変した。住み慣れた地を離れて、遠い仮設住宅に入った人もいる。それでも3年4カ月。新しい環境を少しずつ覚えてきた。それが再び、土地のかさ上げや区画整理など復興工事で変わろうとしている。プレハブの仮設住宅からビルの復興公営住宅に移ると、部屋のレイアウトも大きさも変わる。家の内と外でまた、記憶をゼロから積み重ねなければならない。

釜石ではいま、阪神大震災で被災した男性ボランティアが孤軍奮闘している。近所の人、通りがかりの人が声をかける。ここでもコミュニティの再生がカギになっている。（山）